

Maki Fine Arts

www.makifinearts.com

5-1-1F, Nishigokencho, Shinjuku-Ku, Tokyo 162-0812

Email: info@makifinearts.com Tel: +81-(0)3-5579-2086

荻野僚介(-ness)

2018年5月11日(金) - 6月10日(日)

オープニングレセプション: 5月11日(金) 18:00 - 20:00



Maki Fine Arts

www.makifinearts.com

5-1-1F, Nishigokencho, Shinjuku-Ku, Tokyo 162-0812
Email: info@makifinearts.com Tel: +81-(0)3-5579-2086

Maki Fine Artsでは、2018年5月11日(金)より、荻野僚介 個展(-ness)を開催致します。

荻野僚介は1970年埼玉県生まれ。「色彩」と「形態」をテーマに、均質に塗られた色面による絵画作品を制作しています。1993年明治大学政治経済学部卒業、1998年Bゼミスクーリングシステム修了。近年の主な展覧会として、「ハロー」(Gallery&cafe see-saw、2016年)、「個点々」(switch point、2015年)、グループ展「ペインティングの現在 -4人の平面作品から-」(川越市立美術館、2015年)など。Maki Fine Artsでは初の個展、ぜひご高覧ください。

-

秩序の感覚

林 卓行(はやし・たかゆき | 美術批評／東京藝術大学准教授)

現在、さしあたりできあがった作品のよしあしのことをかんがえるのでなければ、どんなものを描こうとそれでひとまず絵画にはなる。すでに1890年にはモーリス・ドニが記していたように、いまやわたしたちはたえずタブロー=絵画について、「それは軍馬や、裸婦や、なにかの挿話であるよりもまえに、本質的には、ある秩序のもとに集められた色彩で覆われた、一枚の平面であることを思い出さなければならない」。

とはいえたまに、これは画家にとっては恐ろしいというか、すくなくともやりにくい状況をつくりだす。ドニによる絵画の定義は、平面上に色斑さえあれば絵画になるからどんなものを描いてもよいというような、描くことの自由を説く命法では終わらない。なにを描いてもよい、どうせ絵にはなるのだからとひとたび口にしてしまえば、むしろ自由の底は抜け、なにかを絵として描く根拠は見失われてしまう。だからこそドニは、「ある秩序のもとに集められた」と留保をつけることを忘れない。その行儀のよさを嫌ったのだろう、ドニ以降の画家や絵画について語る者たちは、「秩序」を廃して新たに「根拠」となるものをうち建てるに躍起になった。絵画はキャンヴァスの外形や支持体の組成から導き出される所と、心理や神秘を可視化する所とをもつた、あるいは一群の社会的な問題に即応する、と言つてみたり。

これに対して荻野は、根拠を求めず秩序の水準にとどまる所を選ぶ。まずその絵画をまえにして、わたしたちがほとんどあっけにとられるのは、彼が「なにを描いてもよい」というドニの命法を額面どおりに受け止め、なんの根拠も持つことも求めることもないままに描き進め、そして最後にはひとつの絵画をみごとにものにしてしまうからだ。画業を通覧するとわかるが、具象から抽象まで、重量計からカリグラフィーを思わせるやわらかな描線を経て、濃色の色面と蛍光色の線条のせめぎあうようすまで、つぎつぎとそこに描かれてゆくものたちの狂騒的なまでの多様性、あるいは無根拠性は、もしそれに気づくことができたなら、わたしたちをぞくりとさせるに十分なものである。

荻野の作品を特徴づける、職人芸的に消去された筆触や、画面サイズの記述がそのまま作品タイトルになるという奇妙な命名法は、このざわめきをおちつかせ、彼の作品群に一定の様式的な統一を与える効果を持つ。しかしそれはある種のダメ押しのようにして、最後にやってくるものであることに注意しよう。「秩序」がそのままにくる。荻野の作品にあって色面の境界はいつでも明快であり、それは境界の水準だけでなく判明な地と図の区分となつてもあらわれ、さらにそのとき図として配される形態は、画面中央やそこをやや下った、視線のごくとどまりやすい場所に落ち着いて、画面を構造的に安定させる。意表をつく形状の変形キャンヴァスや、キャンヴァス側面に配される棒状の色面も、おおくは画中のほかの要素との均衡を保ちながら用いられている。高圧的とも言える「秩序」の感覚が、描かれる個々の色彩や形態の底なしの自由を覆っている。そこから聴こえてくる不穏なざわめきに、わたしたちはいつも耳を傾けてしまう。

-

■展覧会名 荻野僚介(-ness)

■会期 2018年5月11日(金) - 6月10日(日)

オープニングレセプション:5月11日(金)18:00 - 20:00

■会場 Maki Fine Arts

〒162-0812 東京都新宿区西五軒町5-1エーワビル1F

Web : makifinearts.com / Tel:03-5579-2086 / E-mail: info@makifinearts.com

■営業時間 水曜 - 土曜 12:00 - 19:00 / 日曜 12:00 - 17:00

■定休日 月・火・祝祭日

Maki Fine Arts

www.makifinearts.com

5-1-1F, Nishigokencho, Shinjuku-Ku, Tokyo 162-0812
Email: info@makifinearts.com Tel: +81-(0)3-5579-2086

「星を見よ」

作品がばらばらだと、時にあるいはしばしば言われてきた。自分でもいろいろな絵を描いているとは思っている。個々の作品は、その構造、文節化も異なつていよう。

ところで言うまでもなく、愛は「愛」という言葉以外でも伝えることができる。悲しみは笑顔のなかにも、陽だまりのなかにもある。青い世界を表現するために青を用いるのではない。四角を言いたくて四角を描くわけではない。すい、かには塩をかける。

作品は演繹的に作り出されるわけではない。個々の作品が帰納的に描き出す作品世界。そもそも比喩でしか言い表せない世界や、眼差しあるいは視差でしか示せない世界があるわけで。

作品の総体は、一点一点の作品という星が織りなす星座と言えるかもしれない。それぞれの作品がそれぞれの位置を持つ。この点は蟹の目かもしれないし、あの点はこぐまの指先かも。こここの点の流れはスカートの襞だろう。抽象形態かもしれない。冬の大三角形っていったいどんな了見ゆえでしょうかね。「冬の大三角形」、言葉もいいな。素敵です。

星座を成す星たちは、生まれた時がばらばら。一人の作家の作品が、左から右へ、あるいは右から左へ、一本の線上に位置づけられるものではないことのアナロジーとも言える。

また、星それぞれは、ひとつの平面上に存在しているわけではない。この星の何億光年向こうに、奥行きを持って隣の星がある。立体的に把握すること。その距離が、この作品とあの作品との遠さとすることもできるかもしれない。間違えてならないのは、決して作品同士の遠さ、それ自体を求めているわけではないということ。

星座の話となると、星は単なるその構成要素という位置を与えられかねない。しかし、何はなくともまずは星である。あくまでも作品、星が存在して初めて、事後的にそれらが結ばれるのである。星座が先行してあり、そこに当てはめるように作品を作り出すのではない。作品一点一点が光り輝く星でなければ。それにより、自ずと各々の位置が与えられる。「光り輝く」というのは、作品の強度のこと。どんよりした色の絵でも、居心地の悪い絵、不穏な絵、間抜けな絵であっても、その個々の作品たちが持つ固有に光り輝くやり方で。もちろん、調和のとれた絵、美しい絵でも。

星座は星が生まれた時から遙かな時が下った後、遠い地球からの視点により生まれた。時間的、物理的に遠い星座。もはや存在していないかも知れぬこの光をもつなげた。星を見たから像が結んだのだ。

荻野僚介

(『アクリラート 別冊2017』ホルベイン画材、2017年、43ページ)